

【R—typeFinalⅡ】 シャ
インスター～桜乃そら
の不幸な前日譚～

一条和馬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拙作【R—TYPE Final II】東北イタコのハッピーな1日【VOICEEROI D遊劇場】(<https://www.nicovideo.jp/watch/sm38671969>)の外伝小説となります。全三話の短編を予定。

※本作品はR—TYPE FINAL II世界の設定ですが、一部TACTICSの設定も流用しているパラレル世界です。

pixivには本編の支援絵もあるので是非見ていってね!!

(<https://www.pixiv.net/artworks/9025040>)

目次

第一話【誕情―タンジヨウ―】	1
第二話【初刃―ウイジン―】	16

第一話【誕情ータンジヨウー】

地球衛星軌道上付近に、突如バイドの群れが転移してきた。

木星への直距離ワープの準備をしていた私達第三地球防衛艦隊は作業を中断し、これを迎撃する為に部隊を展開。私も宙へと飛んだ。

『いくぞお前達！ 男を見せろ!!』

『了解!』

地球を横目に、友軍のRー9A4〔ウエーヴマスター〕が解き放たれた矢の様に一直線に宇宙を切り裂き飛んでいく。私はRー9DH3〔コンサートマスター〕のコックピットからその光景を眺めていた。隣にはもう一機のコンサートマスターが並んでおり、機体上部にペイントされた星のマークが輝いているように見えた。

『どうした副長?』

「大隊長……私は性別的には女性なので男は見せられません」

『はっはっは! そんな軽口を叩けるなら大丈夫だな!』

豪快に笑い飛ばす“少女”の声はそう言っていたが、実際は頬に汗が垂れる程に緊張

していた。しかしヘルメットを脱いで拭く余裕もない。

私は「作られた兵士」だと言うのに、何故創造者はこんな面倒な機能を装備したのだろう？ オリジナルはそうだったと言われそうだが、オミットするのがそれ程までに面倒だったのだろうか？

「今は考えても仕方ないですね…！ シャインスター02、続きます！」

● 私 は 桜 乃 ぞ ら 。

火星の衛星軌道上に存在する地球連合軍の研究施設「人工知能研究所」で開発された「ボイスロイドⅡ型」という一種のアンドロイドらしい。いや、女性モデルだからガイノイドの方が正しいか。

『……失敗作だな』

「私」が最初に目を覚ましたのは、冷たい液体が満ちる培養槽の中だった。黒く長い髪の女性がそう吐き捨てていたのは鮮明に覚えている。

『戦闘スキルのラーニングは完了していませんが？』

『キミキミ……これは「人格移植用の実験体」だよ？ 一番大事な部分を綺麗さっぱり

忘れておいて何が成功なのかね?』

『そ、そもそも“あの例”は事故から起きたようなもので再現性は難しく……』

『一度成功したという事はつまり、試せばいつかできる訳だよ。まさか君は研究者の端くれでありながら一度や二度の失敗で諦めるのかね?』

黒髪の女性の横にいた白衣の男性が何度も頭を下げていた。チラチラとこちらに視線を向けていた男性だが、その眼の色は同情や正義というより、欲情した獣のそれに近い。

『ハツ……！ 研究的には失敗作とは言え、“人形”としての使い道はあると言う訳か！ 玩具を壊されたくないなら最初からそう言いなさい。どうせ廃棄予定なんだし、好きにすればいい』

直後、培養槽のガラスが持ち上がり、私は床へと流された。

「う……あ、う……」

身体に力が入らず、声も出せなかった。培養液よりもずっと冷たい床が全身の熱をどんどんと吸い上げていくのが分かる。

「ケツ……TEAM R—TYPEの権化みたいな女め……。こちらら何カ月も研究室

に閉じ込められて出すモンも出せてねえんだよ……!」

男がこちらに迫ってきていた。首も動かせない私は必死に目だけを動かして観察するが、上から白衣を被せられて視界は閉ざされた。何カ月も研究室に閉じ込められていた、というのは比喻ではないらしく、鼻孔を直接殴るような刺激臭が全身を強張らせる。

「……よく考えりや、穴に突っ込むだけならわざわざ培養液拭き取る必要もないか。溶かしたタンパク質みたいなものだしな」

耐え難い激臭から逃れるべく必死になると、ようやく身体が動き始めてくれた。

「うっ……ああっ……」

「おっと」

せめて白衣を引き剥がしたかったが、それを成す前に男に掴まり、引き摺られる。まるで皮と骨だけで構成されているような腕が足首を包んでいるのが分かったが、培養液を潤滑油にして私はどんどん男の元へと手繰り寄せられていった。

「どっ、どうせ捨てるんなら、壊しても問題ないよな……ッ！」

私に、というより自分に言い聞かせるように早口で呟いた男は白衣を剥ぎ取り、そのまま私に覆い被さったー



「……………う、うん……………」

「おう、目エ覚めたか」

次に意識が戻った時、私はベッドの上に寝かされていた。上体を起こす……………驚くことに、先程まで首を動かすことすら出来なかった私の体はすんなりと言うことを聞いてくれた。

「なんともない……………」

「大丈夫……………そうだな」

そこで初めて横に人がいる事に気が付いた私が視線を向けると、パイプ椅子の上になが

に股で座る、一人の少女の姿があった。パイロット用のジャケットを上から羽織っているが、サイズが合っていないのか袖を折っている。そのせいなのか、はたまた童顔の割には豊富なバストを持つていたからか「アンバランス」を絵に描いたような人物だった。

「研究室の前に全裸で倒れてたのをわざわざ俺が運んでやったんだ。無重力様々だったぜ……」

年は10代半ばといった所だろうが、どうも一挙一動が男臭い印象のある少女だった。

「んで、答えたくないなら別に良いが、あそこで何をしてた？」

「……分かりません。培養槽から取り出されて、白衣の人に襲われたところまでは覚えてるのですが」

「……そういうのを「答えたくない事」だと思うんだが……」

「その人はどこにいますか？」

「俺が研究室を見たときは誰もいなかったが……憲兵に被害届でも出すか？ その、受

理されるかは分からんが……」

「いえ、衣類から嫌悪するレベルの刺激臭が漂っていたので、洗濯を薦めようかと」

「……君が個性的な感性を持ち合わせている事はわかった」

そう言った少女はこめかみを押さえながら「これが『ボイスロイド』の……いや、最近の若者の思考なのか……？」と呟っていた。

「……そういえば自己紹介がまだだったな。俺はこの第三地球防衛艦隊のR戦闘機部隊『シャインスター大隊』の隊長をやっている『少佐』だ」

「……シヨウサという苗字なのですか？ 珍しいですね」

「いや……名前は別にあるのだが、ちよつと事情があつてな。『呼ばれ慣れて』いないんだ。だから階級の少佐か、大隊長と皆は呼んでいる」

「なるほど。……改めまして初めまして大隊長さん。私は人工知能研究所で制作されたボイスロイドⅡ型の『失敗作』です」

「……自分がボイスロイドだと自覚しているのは珍しくないが、失敗作を自称するのは初めて見たな」

「私の事をそう呼ぶ研究者がいました」

「連中に人道はないからな。ただ、俺は君の事を失敗作とは呼べん。出来れば名前を覚えてほしいのだが……」

「桜乃そら、です」

「ハルノソラか。そつちの方が断然呼びやすい。じゃあ、桜乃。俺は艦長に報告する為に一度離れるが、それまではこの医務室でゆっくりしているといい」

「艦長……という事はここは軍艦の中なのですか？」

「軍艦というにはお粗末な旧式の輸送艦だがね」

「ふむ……」

その話を聞き、私は思案した。研究施設であれば一度“失敗作”認定された私の末路は決まっているだろう。

だがしかし、ここが軍属の施設であればどうだろう？

白衣の研究者は私が『戦闘技能のラーニングは完了している』と言っていた。

で、あれば、そこから自分を売り込む事も可能ではないのだろうか。

「……大隊長さん。私も艦長の所に……一緒にしてもよろしいでしょうか？」

「それは構わんが、流石に動けるようになるまで待てないぞ？ 話は通しておくから、後

でも……」

大隊長さんはそう言ってくれたが、実の所私の身体は自分の力で起き上がる事になんの抵抗も感じていなかった。ベッドから離れて自分の足で立って見せると、彼女は一瞬目を見開き驚いたが、すぐに「いいだろう、着いてこい」と言ってくれた。

椅子から離れた彼女の背は、私の喉元程までしかない程に小柄だった。



「あーあ、久しぶりに本物の女を抱きたいぜ……」

「ケーンお前、ボイスロイドをカウントしなけりや童貞じゃねえの?」

「う、うるせえ! あ、少佐! お疲れ様です」

私が大隊長の後を追って廊下を移動していると、彼女と同じジャケットを着た二人の男性が会話をしているのが見えた。

ボイスロイドは元々21世紀初頭に開発されたアンドロイドだ。

最初は音声合成ソフトだったが、アップデートを繰り返す内に専用の“肉体”を獲

得。少子高齢化が問題視されていた当時の社会で、若者に性への関心を向けるべくラブドールとしての側面も持ち合わせていたそうだが、少子高齢化から脱却を始めるや否やボイスロイドが社会に溶け込む事を恐れた人類によって、アンドロイド製造技術ごと、その存在を抹消されたという。

現在稼働しているボイスロイドはその百年前の技術をレストアし、R戦闘機のパイロットとして再利用しているのだが、残された性処理は兵士達のフラストレーションを解消する一役を担っているらしい。

「ケーン。お前もようやく愛しの彼女にアタックする度胸を付けたか!？」

「男は女を一度でも抱けば変わるといふのは少佐のお言葉ですよ?」

ケーンと呼ばれた男性は、とにかく髪型が印象的だった。確かりーゼントという名前だった気がする。

「事務的な反応しかしねえボイスロイドで男を上げた気になつてもなあ。そうだ、大隊長。今度俺と寝ませんか?」

「おいおい。これでも純潔の乙女だぞ? 後五年生き残つて俺より強くなつたら考えて

やる」

「三年で墮としてみせます！」

「言ってるスケベ野郎」

ケーンと話していたもう一人の男性の言葉を適当にあしらった大隊長に続いて、彼らの横を素通りする。「ヒュー。ブロンドの美人ちゃんだ」「少佐も変わらずな様で。よっ！ スケベ親父!!」「お前達後で覚えてろ!!」

「……大隊長さん。答えたくないのであれば別にいいのですが、あなたの性格や周囲からの評価は外見から乖離し過ぎていると思います」

「さつきとは立場が逆だな……。ま、隠す事でもないから言うが、俺は元々普通の人間だったんだが、ある「事故」のせいで記憶、性格、人格に至るまで全部この肉体に移ってしまっただ」

「……そう言えば私は「人格移植用の実験体」と呼ばれていました」

「俺の事故を再現しようとしたのか。……連中の考えそんな事だ……おつと」

期せずして私の「成功作」であるという事が判明した大隊長さん。そんな彼女(?)

がある一室の横を通り過ぎようとしたとき、部屋から出てきた黒衣の人物を接触しかけた。が、そこは流石軍人、物凄い反射神経で突撃を回避していた。私も立ち止まり、黒衣の人物に目を向けた。

「おやおや、これは少佐殿。それに桜乃そらさんではありませんか」

「私をご存知なのですか」

「貴女の母の様なものですよ。皆はドクターYと呼びます」

「はあ……」

「ふふ、報告通り、変わった感性をお持ちの様ですね。素晴らしい。个性的なのは良い事です」

「先程大隊長さんにも言われました。个性的のついでに聞きたいのですが、燻製が何かをご趣味でやっておられるのですか？ ドクターの衣類から煙の臭いがしますが」

「そうなのですか、ドクターY？」

「レディーに体臭の事を聞くのは失礼ですよ少佐殿。……ちよつと研究の合間に、ゴミが出たもので、ちよつと強めに炙って、処分”していたのですよ”」

「なるほど」

納得した様子は見せたが、どうも解せない事があつた。確かに何かを焼いた様な臭いはするが、それとは別に微かに鼻孔を刺激する悪臭が確かに存在した。それは、白衣の男が身に纏っていたものに似ている。こんな酷い臭いの人物が艦内に二人も三人も徘徊していれば衛生問題に関りかねない。

「もう一つ質問よろしいでしょうか」

「なにか？」

「コート臭いますよ。洗濯をオススメします」

「……ご忠告どうも。『人間』に言われても気にしません、娘に言われてしまったのであればしつかり洗浄しないとイケませんねえ」



「桜乃、彼女が俺の上司だ」

「ようこそ、で良いのかな？ 私がこの艦の艦長の東北ずん子よ」

「初めまして艦長さん。桜乃そらと言います」

ブリッジに通されると、大隊長さんは白い軍服を着た女性を紹介してくれた。物腰柔らかな印象のある少女、といった雰囲気を感じる。

「……答えにくいなら良いのですが、もしかして艦長さんもボイスロイドで？」

「ズバズバ聞いてくるわね……。その通りよ。指揮官モデルっていう、生まれながらの中間管理職ね」

「なるほど……。では同じボイスロイド同士、是非お願いしたい事があります」

「何かしら？」

「私は『失敗作』として破棄される予定だったらしいのですが……。戦闘技能のラーニングはされています。どうか私を拾って『再利用』してくれないでしょうか？」

「……君、変わってるね」

「よく言われます」

自分の置かれた状況と、自分の要望を素直に申し出ただけのつもりなのだが、大隊長さんも含め、素つ頓狂な表情で私の言葉を聞いていた。

「自分を売り込むほどに感情を持ち合わせていながら、失敗作と言われて平然と受け入

れるその感性……随分個性的だ」

「よく言われます。それで、どうでしょうか？」

「そうねえ……。私は別に良いと思うけど、少佐の意見も聞いてみましょう」

「戦闘技能習得済みのボイスロイドというが、ウチの大隊の八割はそうだからな。面接での判断材料としては少々パンチが弱いが……熱意のあるボイスロイドというのも珍しい。一度仮想訓練で能力を図ってから判断するが、良いか？」

「望むところです」

こうして、私の「シャインスター」としての長い戦いの幕が開けた――。

第二話【初刃—ウイジン—】

「こちら軍事要塞グリトニル。『お嬢様』の体調はどうか？」

『こちらニヴルヘイム級壱番艦 “ファンタムレディ”。この子は素晴らしくご機嫌だ。ちよつと大食いな所はあるが、旗艦としては大満足の出来栄えだろう』

「しかし、強力すぎて全力でテストする為にこんな所までくるなんて、アンタ等も大変だな』

『全くだ。ま、そのおかげで遭遇したバイドの群れを掃除できたんだ。有難く思つてくれ』

「本当か!? それは助かる!」

『氣二するな。我々も、早く ち キユウに、かえり たい カ らな』

「……ん? すまないファンタムレディ。通信が途切れ始めた様だ。カタコトに聞こえるぞ?」

「き、緊急連絡! ファタムレディ内部にバイド反応多数! 『浸食』されています!!」

「なんだと!? まさか連中……気が付いていないのか!? おい、ファタムレディ聞こえるか! 応答しろ!!」

『かえ　ル……』

「フアタムレデイ前方に空間歪曲の反応を確認！」

「地球へワープするつもりか！　グリトニル内の部隊を出せるだけ出せ！　フアタムレデイもそうだが、彼女をキズモノにしたバイドも近くにいる筈だ！　一匹たりとも地球には向かわせるんじゃないぞ!!」

●
私は桜乃そら。

創造主に「失敗作」と切り捨てられたボイスロイドである。しかしそのまま素直に破棄される事を受け入れられなかった私は、気絶していた所を保護してくれたシャインスター大隊の大隊長である「少佐」の上官である東北ずん子艦長に軍人として雇ってくれないかという交渉をした。その結果試験を受ける事になったのだが……。

「はあ……」

個人的な評価は、散々だった。

イメーシファイト
仮想訓練で使用したのはR—9K “サンデーストライク” という量産機。

流石に元となったR—9C “ウォー・ヘッド” には劣るものの、低コストで整備性に優れるこのR戦闘機は主力機として連合軍内部で広く使われている機体だ。これに乗りにこなせば立派なパイロットとしてどこでも通用する訳だが……残念ながら試験で提示されたエネミーの全撃破を前にこちらが撃墜判定を受けてしまったのだ。機体の方も、なんというか「全力を出し切った!」という風には感じられなかった。極めつけに試験結果をまとめた資料や映像を持った大隊長さんが部屋を出てから一時間ほど待たされている。これはきつとR戦闘機に乗せるより弾頭にでも突っ込むべきだという話をしているに違いない。

いやしかし、ボイスロイドは全て機械部品であるロボットとは違い、強度で言えば『ちよつと硬い人間』程度のもの。つまり鉛弾の代わりにもなれないという事だ。そのせいで今後の処理に困っているのだろう。ボイスロイドとしての役割である性処理能力という観点から見ても、少佐に比べて貧相な身体である私では肥えた目を持つシャインスター大隊の人達には相手にされないだろう。

これは困った。炊事や洗濯等のスキルは今からでもラーニング出来ないものかと本気で検討を始めた頃、実に一時間と12分ぶりに大隊長さんが部屋へと戻ってきた。

「待たせたな……どうした、桜乃？」

「いえ……弾頭にもなれない我が身をどうやって売り込もうか思案しておりました」

「……？」　　「ウォー・ヘッドになる」の意味は分からんが……もしかして、待たせ過ぎて拗ねたか？」

「大隊長さんが言葉を選んでくれているのは重々承知。私の事など気にせず、是非単刀直入に結果を教えてほしい下さいです」

「おい、言葉が変な事になってるぞ……まあ、そう言うなら試験の結果を伝えよう。はつきりと言わせてもらおうが……驚愕した」

「やはり……そんなに酷かったのですか！　補習ステージなどご用意してくだされば、次こそは期待に応えて見せます！」

「酷い？　まさかお前自分が落第だと思ってたのか？　逆だ逆。結果が予想外の斜め上過ぎて部下達にも聞いて回ってたんだけだ」

「予想の斜め上……？」

「そうだ、と頷いた大隊長さんは私の隣まで歩み寄り、備え付けの椅子に大股を開いたまま腰を下ろした。」

「はしたないですよ」

「中身はバツイチのオッサンだぞ、無理だ」

とてもそうは見えない小柄な少女は資料を挟んだバインダーで顔の前を仰ぎながら続ける。

「戦闘技能ラーニング済みのボイスロイド用のテスト項目つてのがあるんだがな？ 最初の奴だ。それは難なくクリアしたんだが……その時他の連中と明確に違う。何か”を感じたもんだから、桜乃には悪いが途中から部下達のデータをを使用した仮想敵を用意したんだ。その中にこっそり俺や居合わせた部下もNPCのフリをして参加してな。その結果……お前は俺達のほとんどを撃墜した」

「訓練とは言え、私は就職希望先の先輩方をボコボコにしてみましたという事ですか。それは心証を悪くしてしまつたに違いありません」

「いや、どうせ負けたのはデータだ。……そこはいいんだよ。問題はお前の“動き”だ」

「ああ。ボイスロイドつてのはどうしても教本通りのパターンを完璧に行動する傾向にあるんだ。そいつらが現場に出れば出る程洗礼化されていき、あつという間にエースパ

パイロットが誕生する……というのは俺の“戦友”にも何人かいるから知っているが……最初から教本通りに動かないお前みたいなのは非常に珍しい。“ボイスロイドらしい”動きというよりどちらかというところ“技術はまだまだだが抜群のセンスで動かしてる人間の新人パイロット”の動きだ」

「それってボイスロイドとしても落第という事では……？」

「団体行動を目的とするなら確かに青いが、R戦闘機というのは本来“一機だけでも敵を殲滅できる”をコンセプトとした兵器だ。その観点から見れば桜乃、お前くらい我が強いのは寧ろ重宝する」

「つまり……！」

意気消沈していた私にも、ようやく大隊長さん……いや、大隊長の言葉の意味を理解し始めていた。

「合格だよ。百点満点中二百点くらいなのな！」

「……ありがとうございます」

「それで桜乃。合格通知と一緒に渡すのも変な話だが……既に任務が入っている」

「バイド……にしては冷静ですね。差し詰め試作機のテストパイロットの様なもので

しようか？」

「こういう時察しの良い奴は助かる。実はな、次期主力R戦闘機のコンペティションが迫っているのだが……お前にはウチの代表をやってもらいたい」

TX—T “エクリプス”。

本来はザイオン慣性制御システムによる急加速・急減速を調べる為の可変機構テスト機なのだが、「この性能なら主力量産機としても充分通用する筈だ！」と主張する火星の連合軍によって基礎から見直され、生産性向上が図られたR戦闘機だ。

既に次期主力機は完成していてテストを残すのみだったのだが、地球の連合軍からすれば「このまま一人勝ちしても面白くない」から火星の挑戦を受け取ったとか。

試験は八つある防衛艦隊、そして火星軌道艦隊、軍事要塞ゲイルロズ、グリトニルの計十一か所でそれぞれ評価試験を行い、そこから総評するとの事。「思ったより大規模にやる事になったが……つまりそれほど連合軍上層部は暇してるのだろう」というのは大隊長の言葉だ。そして私が所属する事になった第三地球防衛艦隊がボイスロイドを一番多く兵力として使用している艦隊として『ボイスロイドをテストパイロットとした

試験』を言い渡されたという。

「私の様な新参加者が受けていい任務なのでしょうか？」

「他のボイスロイドに任せると俺の部下達は難色を示すが……総出で挑んで振り返りにしてきた桜乃が代表になるなら文句は言わんだろう」

「それで皆さん声を掛けてくれる機会が増えたのですね。先程七番隊小隊長のケーンさんに格納庫に来てくれないかとお願ひされました。きつと『調子乗んなよ新参加者が。ペツ』と喧嘩を振られるに違いありません」

「あの馬鹿は本物の女よりボイスロイドに入れ込んでるからそういう意味ではないと思うが……これから大事な試験に備えて特訓してもらおう桜乃に万が一があつては困る。そこには俺が出向いておこう」

「助かります」

「試験は一週間後だ。それまでにエクリプスの特性を身体に叩き込んでもらおう」

「基本性能は前身機体であるRX-110『アルバトロス』と同じなのですよね？ そちらに関してはお話を頂いてから既に何度かシミュレーションしています」

「なら基本は押さえてると考えて良いな。では早速実機に触れて微調整していこう」

一週間はあつという間に過ぎた。

簡潔に申すと、とても大変な一週間だった。どうせ模擬戦をするならと訓練相手を買ったのだが、シャインスター大隊の皆様は血気盛んなのか隊長を除く全員が対戦相手として立候補。結果的に毎日ほぼ全員の相手をさせられたのだ。その後もしきりに食事に誘われたり、ベッドへのお誘いがあったりと、とにかく一人でいる時間の方が少なかった。その結果、特訓の副産物として平時戦闘時間問わず部隊員全員の癖をほぼ完璧に覚えてしまった。大隊長に戦闘記録のついでにこのデータも渡すと「俺より理解してそうだ」と称賛してくれたのは、怪我の功名というものだろうか。

「これだけ部下を把握しているなら、部隊の副長に任命して俺の補佐をしてもらうつてのもアリかもしれないな」

「まだ実戦経験もないのですよ？ 流石にそれは他の隊員に申し訳ないです」

「今のアイツら、俺よりお前の言う事聞きそうだからむしろ絶賛すると思うぞ」

「大隊長、それはおそらく言動に対して容姿が可愛すぎるのが原因だと思えます」

「オッサンに可愛いとか言うな」

大隊長含め友好的な関係も築き上げられてきた実感に包まれながら移動していた私達が向かうのは、エクリップスが待つ格納庫だ。ここは東北ずん子艦長の輸送艦内部だが、「対抗馬」とそのチームも乗り合わせているらしい。先程到着したばかりなので、本格的に顔を合わせるのはこれが初めてとなる。

「搬入作業は終わっているな。……これがワイズマンか」

格納庫に入るや否や視界に入った真っ黒な機体を見て眩いた大隊長の横で、私も足を止めた。

R-9 W “ワイズマン”。

基本的にはR-9 “アローヘッド”と踏襲した堅実な性能。フォースも“スタンダードフォースH”という純粋な強化版をしようしているという。ここまで聞くと悪くない機体なのだが、噂ではこのR戦闘機用に開発された波動砲“ナノマシン波動砲”というものが曲者らしい。

「……大隊長。大変です」

「どうした」

「エクリプスの前に見知らぬ人物がいます。相手チームの工作人員かもしれません」
「まさかそんな卑怯な……む、あれはきりたん大尉ではないか」

大隊長の後を追い不審人物へと歩み寄る。全身黒づくめなのはいかにも怪しい。近付いてみると連合士官の制服をカスタムしたものを着用しているのが分かった。

「久しいなきりたん大尉！」

「もしや……少佐殿!? 噂には聞いていましたが、その……随分と雰囲気柔らかくなりましたね」

「言葉を選びやがったな! おっと、紹介しよう。桜乃、コイツは東北きりたん大尉。以前の戦い……第三次バイドミッションでは何度か一緒に飛んだ事がある」

傍から見れば十代女子二人が似つかわしくない軍人トークをしているというシュールな光景ののだが、違和感を覚えなくなってきた私は随分とこの艦隊に毒されてきた気がする。それはさておき紹介された黒づくめの少女……きりたん大尉の苗字がずん子艦長と同じである事に気が付いた私はこの質問をせずにはいられなかった。

「大尉殿。答えにくいのであれば別にいいのですが、東北……という事はずん子艦長の？」

「ああ。〃設定的には〃妹になっている、ボイスロイドだ」

折角私がプライバシーの侵害を回避する為に前置きを置いたうえで質問したのに、大隊長の方が代わりに答えてしまった。ちよつとドヤ顔になっているのは外見に釣られて始める様になった癖だ、というのは既にシャインスター大隊の面々からの取材で把握済みである。

「君の話は姉さんから聞いているよ。桜乃そら君」

「前大戦の英雄に名前を覚えて頂いて光荣であります」

「そんな大層なものじゃないさ。現に私はあの時の負傷でパイロットを引退して、今は少佐殿の提案で指揮官になるべく再勉強中の学生だ」

「戦場を熟知しているボイスロイドというのは、意外にも少ない。大尉には是非これからのボイスロイド達の為にも立派な艦長になってほしいものだ」

「なるほど……という事はつまり、エクリプスに張り付いていたのも勉強の一環と」

「いや……これはその……複雑な可変機能を持つこのR戦闘機は、さぞかし『塗り甲斐があるな』」

「は？」

「……いや、忘れてほしい。それより私のチームのテストパイロットを紹介したいのですが、その前にお二方には把握してほしい事があります」

「どうした大尉」

「テストパイロットの名は『東北イタコ』。……名前からお察しの通りボイスロイドなのですが、彼女は試験的に『自分を人間だと思わせて』運用する様にとドクターYから言い渡されているのです」

「苗字が同じきりたん大尉がボイスロイドという事を知っていれば、答えには辿りつけそうなものですが？」

「いや、彼女にはそもそもボイスロイドという存在自体を伏せている。念を入れて私の苗字もな。……少佐殿、ドクターYの思惑はさっぱりですが、どうかご内密に願います」

「了解だ。桜乃も気を付けてくれ」

「分かりました」

「では後程。……例えお世話になった少佐殿の秘蔵っ子とは言え、こちらも手加減する

つもりはありませんので」

「小便臭いガキがいつちよ前にナマ言う様になったわけか！　そこまで言うなら期待させてもらうぞー！」

「大隊長。その言葉使いは子どももの教育に悪いですよ」

「桜乃君、きみもサラツと私の事をバカにしていなかね？」

●

試験内容はフォースを使用しない、純粋な機体性能テストだった。指定エリア内に設置された仮想敵をどれだけ迅速に、かつ的確に撃破できるかを競うという。

「シャインスター大隊所属桜乃そら。これよりTX—Tの評価試験を開始します」

エクリプスの調子は、上々だった。訓練の合間に整備班とも積極的にコミュニケーションを取っていた結果、私の癖にも配慮された細かい調整が施されていた証拠だった。

試験は仮想敵の配置場所は流石に伏せられていたが、種類だけは事前に連絡されてい

た通りだ。

レーザー砲台 “フォトンドーニ”。

“鬼戦闘機” の名で知られる無人兵器 “バット”。

A級バイドと仮定したマツキャロン級巡航艦。

そして友軍という体の撃墜してはいけないターゲットだ。

試験中にいやらしいと思ったのは “バイド汚染された友軍” という仮定のターゲットの存在。最初は友軍信号でありながら途中でこちらに攻撃を開始し、エネミー判定が出るまで時間が掛かる厄介な奴だ。

因みに私は何発か回避した後には仕組に気が付いて反撃したが、エネミー判定が変わる前に叩き落したので評価ではマイナスを受けてしまった。戦場で悠長に上の判断を待てと言うのかと文句の一つも出てくるものである。

『なかなかやりますわね』

目標ターゲットを全て撃破し戻ってくると、ワイズマンに搭乗していた東北イタコからの通信があった。ワイズマンの大きな外見特徴の一つに “試験管型キャノピー” というものがある。これは文字通りキャノピーのデザインが試験管に見える事が由来さ

れている。目盛りまで刻まれているのは何かの冗談だと思いたいが、それはさておき、内部もエクリップス……というより通常のR戦闘機とはかけ離れたものだった。主に背面のサイバーコネクタを設置している部分が従来のものより大きく場所を取っている印象がある。

「試験前にプレッシャーを掛けられたのなら幸いです」

『純粹に労ってあげたのにグーパーパンで返されるとは思いませんでしたわ!』

「それとこれとは話は別ですよ。それでは、検討を祈ります」

『ぐぎぎぎ……見てなさい！ わたくしの完璧パーフェクトな戦いを見せて差し上げますわー!』

どうして完璧とパーフェクトで二回同じ事を言ったのか、と聞きたかったのだが通信はそこで切れ、私の操縦するエクリップスがハンガーに戻ると同時に東北イタコに乗せたワイズマンが発進していった。

「お手並み拝見、ですわね」

これも結果だけ申すが、彼女は機体の性能をスペック以上に叩き出していた。この一週間の訓練漬け期間で他のボイスロイドの動きは仮想敵としてデータで何度も戦ったが、それらとは比較にならない動きだった。私が苦手とした「味方だった敵」への対処もほぼ完璧。最終ターゲットであるマツキヤロン級巡航艦も波動砲によつて綺麗に撃墜してめてみせた。

「……………ん？　今、波動砲曲がりませんでした？」

戦闘を見ていた私は、ふとワイズマンから発射された波動砲が不自然な軌道を描いて敵を攻撃したことに気が付いた。

「おお、そこに気が付くとは……………。アンタも結構優秀なボイスロイドやねんな！」

モニター越しに一度見ただけなので勘違いかも知れない……………と思ったのだが、突如現れた少女によつて見間違ひではない事が証明されてしまった。背丈は大隊長とさほど変わらないが、まるでドリルのように渦巻いたツインテールがとにかく印象的な少女だった。

「貴女は？」

「ウチは最新型のⅡ型ボイスロイド。『ついなちゃん』や。本来あのワイズマンにはウチが乗る筈やったんやけどな……模擬戦で油断してもうた」

「ならばあのワイズマンは本領を発揮していないと言いたいのですか？」

「その通りや！ ナノマシン波動砲かて、ウチの方がもつと格好良く振り回せるに決まってるー！」

「そのナノマシン波動砲についてお伺いしたいのですが、よろしいですか？」

「なんや自分、知らんのか？ ナノマシン波動砲は文字通り波動砲にナノマシンを混ぜて、発射後に軌道をコントロールする事が出来る兵器や。サイバーコネクタを強化したワイズマンやからこそ積める波動砲やな！」

「発射後に軌道を変更ですか……それは便利ですね」

「せやろ。なんかその関係で使ったらごっつい疲れるって聞いたんやけど……ウチらボイスロイドは人間より頑丈やし、問題あらへんやろ」

「試した事はないのですか？」

「試すも何も、ワイズマンを見たのは今日が初めてやからなあ。ウチらはこれまで前身機体であるR-9AX2『デイナー・ベル』で練習してたし」

つまり、あの東北イタコというボイスロイドは、初見でワイズマンをあれだけ乗りこなしていたというのだろうか？ そう考えるだけでも寒気がする。

『はあ……はあ……こ、こちら東北イタコ。最終ターゲット撃墜を確認……これより帰還しますわ……』

「ついなさんのお話通り、ごつつい疲れていますね」

「一発ちよいと角度変えただけやのにオーバーやなあ。やっぱりスペック的に優秀なウチが乗り込むべきやった……」

モニターを見ながら呟いていたついなさんの言葉は、途中で遮られた。

敵襲を知らせる警報が鳴り響いたからだ。

『艦長のずん子です！ バイド汚染された連合軍の戦艦がワープアウトしたとの情報があり、一番近い我々に迎撃命令が出されました！ あかり少佐、そらさんはR戦闘機で出撃して下さい！』

『こ、こちら東北イタコ！ わたくしもまだ戦えますわ！』

『お姉ちゃ……いえ、イタコさん、大丈夫なのですか!?』

『実戦データはあるに越した事はありませんし、何より二機よりも三機ですわ!』

『……分かりました！ では以降はシャインスター01の指示に従ってください!』

『了解ですわ!』

「実戦か……クソ、R戦闘機は余ってないんか!？」

「残念ですが、この艦には三機しか積んでいません……安心してください、ついなさん。

「この艦は私達が守りますよ」

振り返る事もなくエクリプスのコックピットに飛び乗る。キャノピー越しに見えたついなさんの表情には、何故か善望の色が見て取れた。

●

バイド汚染された戦艦と言うのは、ニヴル Heim 級という最新鋭の戦艦だった。連合軍の新しい旗艦として開発していたが、その性能テストの最中にバイドに襲撃されたという。

『あれだけデカいと狙う手間が省ける筈なんだが……!』

「ええ。なんですかあの弾幕は。狙う所の話じゃありませんよ……!」

旗艦となるべく現在の地球の化学力の粋を集めた戦艦は、バイド化により急速な自己回復力を身に着けてしまった。その回復力は内部の兵器にも影響を及ぼしているように、先程から無尽蔵にミサイルをばら撒いている。こういう時に範囲の広い衝撃波動砲は役に立つのだが、いかんせん一機では相手の弾幕の方が上だった。

『あわわわ……これじゃキリがありませんわ!』

器用に避けながらレールガンを連射してバイドミサイルを迎撃していたイタコさんだが、決定打には欠けているというのが現状だ。

『コイツのフルチャージした波動砲を当てられたら、可能性はあるんだがな!』

大隊長の乗るR-9DH3“コンサートマスター”は長射程を誇る“持続式圧縮波動砲Ⅲ”を搭載した大型R戦闘機だ。確かにあの兵器で一撃粉碎が現在最も成功率が

高いだろう。しかしその為には、あの弾幕の中波動砲をチャージしなくてはならない。更に後ろには家である輸送艦が控えているのだ。下手にコンサートマスターを下げればそちらにも被害が及びかねない。

『……コンサートマスターの波動砲がチャージするまで弾幕を抑えれば良いんですわよね!?!』

「そうですけど……何か打開策が!?!」

『ワイズマンのナノマシン波動砲の操作に全集中することが出来れば、ミサイル程度は裁けますわ!』

『本当か!?!』

「ならば私はその間に一つでも多く砲台を破壊します!」

ミサイル射出口は再生スピードが凄まじく、完全に黙らせる事が難しかった。が、他の砲台はその限りではない。現に主砲は三門撃破したが、再生したのは一門だけど、他に比べてかなり遅い。

『フルチャージまでは45秒掛かる! 東北はその間ミサイルを、桜乃は砲台の破壊に

集中しろー!』

「了解!」

『了解ですわ! それでは……ナノマシン波動砲! いっけえええええええ!!』

ウイズマンから放たれた波動砲が、曲がる。曲がる。曲がる。

まるでイタコさんの意思が乗り移ったかの様に動き回るナノマシン波動砲が、ミサイルを破壊して進む。主力機として推薦されるのも納得の戦闘力だ。だが、今の私には関心している余裕はない。エクリプスの推進装置を可変させ、最高速で突撃。ミサイルの弾幕をかいくぐり、衝撃波動砲で艦橋ごと主砲を叩き潰す。旋回し、もう一撃。ナノマシン波動砲が消えた一瞬の隙に合わせて衝撃波動砲でミサイル発射口を破壊。即再生してミサイルが迫るが、それらは再び放たれたナノマシン波動砲が蹂躪する。

「まだなのですか……!?!」

『残り20秒だ!』

こちらの企みに気が付いたのか、ニヴルヘイム級に動きがあった。

『こちらずん子！ 空間歪曲を確認したわ！ ワープして逃げる気よ！』

「そんな事……！」

『ゲホッ……させませんわ!!』

再生しかけていた艦橋を再び吹き飛ばす。機体の横をナノマシン波動砲が並走し、更に加速。ニヴルヘイム級後部のバーニアを粉々にした。

『チャージ完了！ 下がれお前達!!』

「了解！」

『……ッ!』

『持続式圧縮波動砲Ⅲ照射!!』



この日の事を、ウチは今でも覚えてる。

ワイズマンのナノマシン波動砲は、パイロットの脳波によってコントロールする事が可能な武装。当然、使えば使う程パイロットには負荷が掛かる。

戦闘を終え帰還したイタコはんは、自力で動けない程に衰弱しきっていた。試験管キヤノピーというのは、まるで“この事”を想定していたかのようにキヤノピーだけの取り外しが可能であった為、イタコはんの救助はスムーズに行われた。

医療班は手を尽くしたという。が、“この”イタコはんは助からなかった。実戦で勝利し、そこで燃え尽きる。

戦士としてこれ以上ない名誉ある“死”やと思う。

数多のエースパイロットの“経験”を記憶に刻んで生まれたウチは、未だ実戦に出た事が無い事を悔やんでいた。

その中で起きたから余計に、イタコはんが“羨ましくて”仕方がなかった。

例え記憶が引き継がれて新しい身体に入ったとしても、その経験は“生”を実感することが出来るやろう。

戦士として生まれながら、戦場に立った経験のないウチにとって、それは憧れに他ならなかった。

人間は、ボイスロイドを実験道具程度にか見てないから、ウチの言葉なんて聞き入れてくれなかった。戦争をしようにも、敵がいない。激戦区である火星への転属を願えば「お前は備品であって兵士ではない」と突っ返された。

行き場のない感情が爆発し、上官を半殺しにしてしまったウチは今、TEAM R—

TYPEの研究所に送られている。

これからウチはどうなるんやろうか。

トラックを運転する軍人が、次期主力機にワイズマンが決定したという話をしていて。イタコはんの死は「備品の故障」扱いで済まされたという。人間のパイロットがナノマシン波動砲を使用しても、多少の疲労で済んだ為にマイナスの評価には至らなかったという。が、今はそんな事どうでも良かった。

とにかくウチは、戦いたかった。

それも派手に、格好良く。